

“他者に伝える”スキルと秘訣と醍醐味と

坂本 壮

国保旭中央病院救急救命科

高橋宏端

順天堂大学医学部総合診療科

鎌田一宏

福島県医科大学会津医療センター

今年10月、帝国劇場ではミュージカル“エリザベート”が開幕した。ミュージカルは多少のアドリブはあるものの、基本的に台詞や歌詞は決まっている。何度観たって大きな変化はない。しかし、“エリザベート”は何度も観てしまう。

2017年、私は高橋先生・鎌田先生と共通の知人を通じて出会い、意気投合。その後、青木眞先生 (p.1414) 宅で手作りカレーをいただきながら、「一緒に活動(“三銃士”と命名)すると、面白いのではないかと青木先生から後押しされ、私たちは動き始めた。この“三銃士”の活動の1つにレクチャーシリーズがある。15分のレクチャーを6〜8名でつないで行うというものだ。他者のレクチャーから得られるものは非常に多い。内容はもちろん、伝え方やスキルなども。そう、今回の特集“レクチャーの達人”になるための珠玉の16のTips (p.1461) が、ここでまとめられた。

ミュージカル、落語、オペラなど、一度観て終わりのものもあるが、“エリザベート”のように何度も足を運んでしまうものもある。必要に迫られてではない、観たいからなのだ。「あなたのレクチャーをまた聴きたい!」、そう言われるきっかけとなるであろう本特集をご賞味あれ。

(「最後のダンス」を聴きながら…坂本 壮)

私事ではありますが、2人の子宝に恵まれ、教育についてさまざまな思いを馳せる機会が増えました。その1つが非認知能力についてです。

テストの点数のように誰もがわかる能力(認知能力)は、既に社会にその重要性が認知されており、学校の入学基準として用いられています。一



方で、積極性、粘り強さ、リーダーシップなど客観的に認知することが難しい能力は、一般的な評価が難しく、認知能力と比

べてまだまだ重要性が理解されていません。非認知能力は、塾のように学ぶ機会が与えられにくく、個人の資質として考えられがちですが、センスや性格という天性の才能と捉えるのではなく、スキルと捉えて向上させることが重要です。

うまいとされるプレゼンテーションには、声のトーン、スライドの魅せ方、身振り手振りなど、それなりの理由があります。本特集では、さまざまなジャンルで活躍されている優秀なプレゼンターの実際のプレゼンと、その秘訣をご紹介します。本特集が、あなたの学びの一助になることを期待しています。(憂と共に…高橋宏端)



「青木眞先生 (p.1414) だったら、こんな時、何とかなかな」「どうするかな」。患者さんを主治医のような立場で診始めた水戸協同病院時代は、こんな想いを胸に、患者さんのもとへ何度も飛んで行ったものです。そして不思議と青木先生の声や授業中のシーンを思い出し(幻聴ではない!)、その言葉に何度も救われたことがあります。

誰もがこうした過去の講義や授業の記憶の断片を持っているのではないのでしょうか?

教育の醍醐味は、自分が得た学びを、他者に伝えることにあります。教育により伝えられた知識や技術は、国境を越え、時代を越え、そしていつしか思わぬ形で自分に返って来ることもあります。「講義だ」と硬くならず、自分なりのスタイルで伝えればよいのです。本特集を通じて、日本中、世界中で教育の熱風が巻き起こりますように。(奥会津の山奥から…鎌田一宏)